

宰府画報

太宰府の絵師誌
調査広報誌

第4号

2021年1月
(令和3年)

発行
太宰府市教育委員会
文化財課

調査見聞

よしづくはいざん 吉嗣拝山の印章

一般的に書画では、誰が、いつ、何を
えがいたのかなどに関心が向けられます。
そこに、いかなる状況で、ということが
追記されることもあります。これらのう
ち落款と印章は、「誰が」ということに
つながります。落款印章は、その作品の
完成を絵師が告げるものです。画面には、
画賛があればその右肩に引首印(※1)が、
落款にひとつかふたつの落款印が、そし
て画面下方などに遊印(※2)が捺され
ることがあります。これらを調査して、
その作品がその絵師の手になるものであ
ることを確認していきます。絵師の署名
のくずし字についてはこれまで本紙でも
紹介されてきました。今号では、現在作
成中の報告書に関連して吉嗣拝山の印章
について記していきます。

さまざまな印章

吉嗣拝山は、名を達太郎、字は士辞、蘇
道人と号し、明治四年(一八七二)右手切
断の厄難にあつてのち左手で筆を揮い、獨
臂翁のちに獨掌居士などを称しています。
これらの姓名、字号などが印章に刻される
ことになりました。

具体的に見てみましょう。写真1は拝山
の《墨松図》です。落款に「辛亥夏日拜山」
とありますから、辛亥年(明治四十四年・
一九一〇)に制作されています。落款の印
章はふたつ(写真2、ひとつの印の天地両
面に刻印されています)、上が「海西／拜
山」(朱文)、下が「獨／臂」(白文)です。
賛の右肩に引首印「寸心千古(白文)があ
り、右下の松の樹幹に「游戲／諸／三昧」
(白文、写真3)の遊印がみえます。ここま
では画面上にみるようになります。使用さ



写真1 吉嗣拝山筆《墨松図》
吉嗣家資料

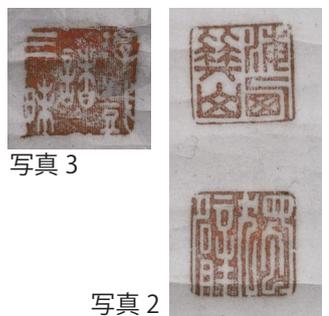


写真3

写真2

れている印章三顆(※3)は現存し、落款
印の側面に「明治甲辰一月爲／拜山先生清
玩／六十一翁／桜雲元刀」の陰刻をみるこ
とができます。明治甲辰年は明治三十七年
(一九〇四)にあたります。

印章の文字

ところで、印章に刻される文字の形は、
わたくしたちが日常使用する文字の形と少
し違ってきます。ここには「篆体」という
文字が使用され、その文字も篆刻者(印人)
によって独特の表し方があり、なかなか判
読できないこともあります。印章の形体そ
のものにも美しいものがありますが、通常
それらは絵師の側にありますのでみるこ
とができます。今回の印章の調査では、そ
の印面だけでなく、印の形、印材、法量、
印鈕(※4)、側款(※5)などを調べ、さ
らに吉嗣家資料中にある「印箋」(※6)、
「印譜」(※7)をみることでできました。

これらをまとめて春先には『報告書』が刊
行されることとなります。どうぞご期待く
ださい。(橋富博喜・太宰府市絵師調査チー
ム)

【キーワード】

- ※1 引首印 関防印、冠官印ともいう。書や絵の冒頭に捺印し、偽造防止の意味もあった。
- ※2 遊印 遊戯の印で、姓名ではなく好みの詞句や思想など自由な文字が刻まれる。
- ※3 顆 印章を数える単位。顆はつぶの意。
- ※4 印鈕 印章を手で持つつまみの部分。芸術的な彫刻が施されるものもある。
- ※5 側款 印章の側面に刻まれた、署名や制作年などの情報。
- ※6 印箋 完成した印章を捺印するための用紙。篆刻家の署名や制作年、製作目的、簡単な解説が記されるものもある。
- ※7 印譜 さまざまな印章が捺印された冊子や帳面のこと。篆刻家本人や、印章を使用した文人、印章を所する収集家などが作成した。

メイショ メイブツ

秋圃の描いた 木うそ

うそ替え神事は、正月七日夜、鬼すべに先
立って、太宰府天満宮の天神ひろばで行われ
ます。区切られた範囲内に木うそを持つて集
まった人たちが、「替えましょ、替えましょ」
のかけ声とともに、暗闇の中で木うそを交換
します。

この時用いられる木うそを、齋藤秋圃が描
いています。写真は裏面の「逸品探訪」のコー
ナーで紹介されている安政二年(一八五五)
頃制作の《筑前太宰府鶴換追儼之図》の木う
そ部分を拡大したもので、現代の木うそと比
べると、羽の羽上げがそれほど大きくはなく、
色や形状がかなり異なっていることに気付き
ます。

秋圃は文化二年(一八〇五)頃に刊行され
た『わすれくさ』にもうそ替えの様子を描い
ていますが、この木うそはさらに形が異なり、
尾羽の羽上げは直線的で細身の、いかにも素
朴な木彫りの鳥として描かれています。
年を経るにしたがって、木うその形が変化
したことがうかがえ、大変興味深い資料です。
(朱雀信城・太宰府市公文書館)

【参考文献】柳智子「太宰府の木鳥」『年報太宰府学』
四号、二〇一〇年)



写真右 筑前太宰府鶴換追儼之図部分
齋藤秋圃筆(福岡市博物館蔵)

写真左 現代の木うそ

逸品探訪

太宰府の絵師に関連する逸品・名品を紹介します

さいとうしゅうほ 齋藤秋圃筆

【筑前太宰府鶯換追難之図】



絹本着色・卷子装 41.0 × 169.8 cm 安政2年(1855)頃 福岡市博物館蔵

太宰府の正月神事

正月七日の夜に太宰府天満宮でおこなわれる、ふたつの神事を巻物に仕立てた作品です。向かって右、画面の前半に描かれるのは、参集者が互いの木うそを交換しあう「うそ替え」、後半に描かれるのは、役に扮した氏子たちが炎を燃やして火難をはらう「鬼すべ」です。画面の署名によって、秋圃が八十六歳の時に描いた作品であることがわかります。

ゆたかな表現

雲間に冴える三日月、ほころぶ梅の花、屋根だけを見せる鬼すべ堂、墨だけのおぼろげに描かれる二本の大木によって、春という季節、夜という時を表現しています。画面を覆う余白には部分的に墨を入れて暗闇をあらわし、神事の様子を際立たせています。夜空と同じ青を基調として、人々が密集するうそ替えの場面とは対照的に、鬼すべの場面では、黒を基調に炎と鬼



うそ替え図部分

面の赤をアクセントにしていて、激しい煙の中を躍動する人々の様子が描かれます。全体の構成だけでなく、部分に目を移すと、人物は表情豊かに細やかに、そして生き生きと描かれていて、秋圃が渾身の力を込めて描いたことが感じられます。

かわらぬ祈り

本作品は天満宮から福岡藩に献上されたと伝わるもので、現在は黒田家資料のひとつとして福岡市博物館に所蔵されています。制作の依頼を受けた秋圃はこのとき天満宮のすぐ近くに住んでいたのです。私たちがカメラを持っていくように絵筆を携えて出かけ、この風景を見たのかもしれない。昔と比べると木うその形に変化が見られ、人々の服装も変わりますが、祭りの風情、そして家内安全を祈る人々の気持ちは、昔も今も同じです。(井形栄子・絵師調査チーム)

いちまい 賞 齋藤家資料

【七福神図】

松竹梅の木立の蔭で、七福神の宴は今まさにたけなわです。溢れんばかりに注がれた大杯のお酒を、毘沙門天は一気に飲み干そうとしています。これを、弁財天はじめ六柱(神さまの数え方)の神さまたちが皆、目を細めて楽しそうにみまもっています。

江戸時代、七福神図はたいそう好まれ、たくさん作例が伝存しています。しかし、画面左後方の、宝物を運ぶ唐子の行列は類例をみません。列のなかには蓑亀(藻のついで)



紙本墨画 45.0 × 83.0 cm

た亀、長寿の象徴)を曳く唐子もいます。そのすぐ前を歩む唐子はこの蓑亀が気にかかってしかたないよう、つい振りかえり、捧げもつ二股大根(大黒天の供物)を取り落としそうです。画面右手、松の樹上には二羽の鶴、いずれも毘沙門天をみつめています。一羽は、身をのりだして、くちばしを開き、声援を送っているかのようです。脇役たちが全体のおかしみを増幅しています。秋圃らしい工夫に満ちた一枚です。(小林法子・絵師調査チーム)

ひとこと ぐずし字

【梅】

梅は早春に他の植物に先駆けて花を咲かせることから縁起のよいものとされています。



太宰府において菅原道真公を追いかけてきた飛梅の説話もあり、二月になると各地で綺麗な梅の花が咲いているのを目にします。市の花にもなっており、まさに太宰府のシンボルといえるでしょう。太宰府の町絵師の作品にも梅を題材にした作品が多くみられます。今回ご紹介するのはそんな「梅」のぐずし



【梅に鶯図】 齋藤家資料より

し字です。字を見ても、左側の木偏は手偏のように書かれ、右側の毎はひらがなの「あ」のように書かれています。齋藤秋圃の後を継いだ梅圃の一字でもあるため、齋藤家資料では頻りにみる文字です。太宰府天満宮参道には名物の梅が枝餅やお店の名前など、様々な所に「梅」の文字を見かけます。これから見ごろを迎え梅とともに、街中のいろんな「梅」を見て回るのも楽しいかもしれません。(木村純也・文化財課)